利尻島における稲荷信仰について

工　藤　浄　真※

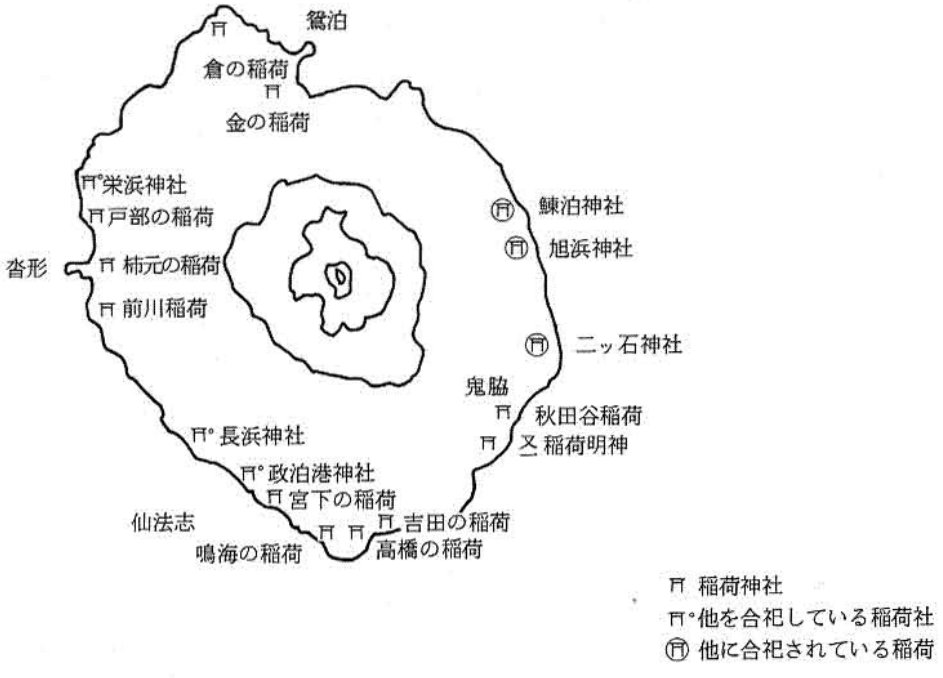
はじめに

利尻町立博物館では、昭和56年度より利尻島内における民間信仰を主要研究テーマとして調査を実施してきた。現在までに、庚申信仰、太平山三吉信仰をテーマとして取り上げ、その調査を行ないその成果を発表してきた。今年度は、稲荷信仰について調査を行ない発表するものである。

1. 稲荷信仰の分布について

稲荷信仰は、日本国中広く円衆の間に浸透し、「お稲荷さん」・「コックりさん」と親しく呼ばれており、全国に約三万社に及ぶ祠堂を有し、伏見稲荷が圧倒的に多く信仰されている。全部が鳥居を有し、神使いの狐を祭祀している。

京都の伏見に本宮があり、その信仰内容は商売繁昌・五穀豊穣の利益ある神とし祭祀されているが、利尻島内における信仰は、漁業神の性格が最も強く、他に商売繁昌や航海安全の神として信仰



第１図　利尻島内稲荷信仰分布図

※ 浄土宗専称寺住職

され、島内随所に信仰者・祠堂がみられる。また、一部であるが、病気治癒を祈願する神としても信仰されている。

信仰の対象者も、個人・集団・部落神社の三者に位置付けられており、殆んど主祭神が伏見稲荷で、他に、豊受稲荷・豊川稲荷・高山稲荷等がみられる。

このように、稲荷信仰本来のものが、漁業を基盤とする利尻島内においては鰊豊漁を祈願する漁業神として変貌し、今日に至っている。

さらにまた、鰊建網業者が特に信仰が厚く、殆ど稲荷堂を建立し、大漁への精神的支柱としていた。

本報告には、現存する信仰集団、祠堂のみを報告の対象とし、その由来、変遷について探ってみた。

2. 建網業者における稲荷信仰

建網業者の稲荷信仰は、概に、文化・文政時代の頃から鰊番屋の近くに漁の神として稲荷社が建てられるという形が生れている。大正12年の利尻島の鰊建網箇所は、191ケ統あり、これらのほとんどが、祭られ信仰されていた事を考えると、稲荷信仰が利尻島内において他の漁業神に比較して突出した数で、如何に多くの漁民の信仰を集めたかが推測される。

現在、建網業者が祭祀し信仰した祠が残されているのは全部で八箇所あり、その中の一ケ所は祠が朽ちて家屋内に祭祀されている。

部落神社として位置づけられているものは政泊、長浜の二ケ所である。

また、多数の信者によって継続されている所は富士岬があり、個人によって守られているものには政泊、野中の二ケ所がある。信者がなく、祠または石碑だけが残っているものは三ケ所である。

(1) 政泊港神社

「坪田の稲荷さん」と呼ばれていたが、昭和30年頃より政泊港神社と改称し部落神社となった。漸く二人程が入れる祠である。坪田伊三郎は、明治28年に現在の福井県芦原町北潟から利尻島鬼脇のライン泊に来住し、鰊定置漁業を始め、そこを本拠地として仙法志政泊にも新漁場を開拓し、利尻島の南部域の開拓の中心的存在であった。この仙法志字政泊に稲荷堂を建立したものが、現在における政泊港神社となったものである。祭具として奉納した太鼓に明治32年の文字があることから、この当時の建立と考えられる。

部落神社になったのは、鰊の不漁続きによる終末期に、漁場の閉鎖と昭和27年頃に金比羅さんを宮下要一氏、滝沢利作氏の二人がこの神社に合祀したこと、また、政泊にはこの他に神社が無く、部落民の合議の上、稲荷信仰者を云々せずに、さらに、当地に築工された仙法志漁港も整備修築されたことなどからも、次第に部落神社としての性格をおびるようになってきた。このことの背景には、坪田氏が地元に常住することはなく、鰊漁期の間だけ来住し、漁期が終ると故郷に帰っていたことなども要因になっている。

祭神は、正一位稲荷大明で、もちろん伏見稲荷である。

祭礼行事は、鰊漁時代には盛大におこなわれており、特に、「網降し」には、供物・神燈・赤字に白ぬき文字の機織をたて祈寿の太鼓の後、酒盛りがおこなわれたという。現在は、年一度仙法志神社の祭典にのみ祭礼行事がおこなわれている。冬期間には、正月の参拝に困るので政泊自治会館内に遷座し、一神時として正月の集まりが開かれている。

この稲荷堂の脇には、何回も網にかかり稲荷神の化身と信じられている、高さ70cm位の自然石が置かれている。

(2) 長浜神社

ここは、昔、「佐々木の稲荷さん」と呼ばれていた。現在の富山氏宅の所に佐々木民蔵氏が鰊漁場を経営していた番屋があり、そこに同氏が造立し祭祀信仰していた１ｍ四方ほどの祠が、長浜神社の起源である。佐々木氏は明治30年頃に、鳥取県岩見郡面影村から来住し、はじめは鬼脇のヤムナイに落着き、２・３年後に長浜に鰊漁場を開き、祠堂を建立したものである。祭神は正一位稲荷明神で、掛軸である。

佐々木民蔵も政泊の坪田伊三郎と同じく鰊漁期だけの季節的な移住であり、鰊漁期が終ると父の長平とともに故郷に戻っていたが、明治末期の鰊不漁が続いたのを契機に大正２年頃に利尻を引きあげた。後、稲荷堂を長浜在住の鳥取県移住者の人々が漁業神として信仰した。さらに、昭和にはいり、戦時色濃厚になって仙法志神社の遥拝所、即ち、長浜神社として位置づけられた。これは、この地域に二つの祠があったのが、位置関係と信者の多かったことから部落神社となったものである。また、秋田県の出身者である佐藤勉氏の祖父久七氏が信仰していた「八幡様」を部落の人々との協議のうえ合祀し、長浜の二つの祠堂を一つにまとめたのであった。

祭礼行事には、稲荷明神の幟をあげ、神楽踊りがおこなわれた。信者の人々の長老格、伊佐田長蔵氏は、当時、森本清栄氏等に故郷の鳥取県因幡の神楽を指導するということなどもあって、非常に賑やかであったと言い伝えている。

戦後になって、長浜自治会館内に移され、年に一度の郷土祭典時に神主が立ち寄る程度の行事となり、さらに、新自治会館が昭和56年に新築された祭にも独立した祠を建立されることはなく、自治会館内に引き続きおかれ現在にいたっている。

また、ご神体の掛軸は、まだ小さな祠の稲荷堂だったころ、その堂が強風で吹き飛ばされたにもかかわらず、木の枝にかかり紛失をまぬがれたことから、尚一層の信仰を深められている。

(3) 宮下の稲荷さん

浄土宗専称寺の裏地、約50ｍ程のところに祠があった。昭和10年頃に鰊建網業者の田中多吉氏が造立したのが始まりであり、田中氏が政泊55番地に漁場を持ったのとほぼ同じ年代である。

田中氏の漁場は、３年後の昭和13年に宮下要一氏が譲り受けたが、稲荷堂もそのまま受け続ぎ、漁業神として信仰した。しかし、昭和30年代にはいり、祠堂の崩壊と、鰊漁の凶漁とにより祠堂の

再建をせずに、ご神体・祭具などを宮下氏宅に移し、宮下キミ氏がその信仰を受け継ぎ現在にいたっている。

鰊漁のはじまる3月中旬におこなわれる「網降し」には、幟を立て供物を供え、大漁祈願の「おみくじ」もおこなわれた。6月の仙法志神社の祭典には、鰊豊漁の感謝の意をこめて、網降しにおこなった儀式同様に祀っていた。

田中氏は、道南の森町、宮下氏は福井県の出身者である。両者とも、昭和初期の鰊合同漁業株式会社の傘下のもとで漁場の経営にあたり、それぞれ鰊豊漁を願って稲荷さんを信仰したものである。

(4) 沓形種富町の稲荷さん

沓形種富町の発電所近くの道路の浜側にある町営住宅の間に、一間四方の柵をまわしたなかに稲荷堂がある。この稲荷堂は、比較的整備されているが、それは、比較的最近まで稲荷信仰が忠実に守られてきたことがうかがえる。

青森県人、柳谷福太郎氏が鰊建網漁業を経営し、豊漁を願って建立し祭祀したものである。稲荷堂の建立年代は、柳谷氏が鰊漁場を開いたのが昭和7年頃であることから、そのあたりと推定される。昭和30年頃まで、いわゆる鰊漁の終わる年代まで祭祀されていたと考えられる。

以後、稲荷の信仰者で稲荷堂の近くに居住していた戸部氏老女が譲り受け祭祀し信仰していたが、5年前に死亡し、以後そのままになっている。

稲荷堂には、廃寺になった日蓮宗妙生寺の半鐘と法鼓が納められている。

祭神は伏見稲荷である。

(5) 高橋の稲荷さん

昭和20年まで仙法志字御崎にて鰊漁場を営んでいた高橋留次郎氏が、鬼脇字野中の移住にともない、高橋氏の先祖である小倉家が祭祀していた稲荷さんを、氏の住宅敷地内に移設し祭祀したのが現在の稲荷堂である。小倉家の先祖十兵衛一族が野中に移住したのは明治21年のことであり、その後、一家族を残して、仙法志御崎や沓形種富町、あるいは礼文島に分散し、それぞれに鰊漁場を営んでいる。高橋氏も小倉家からの分家であり、仙法志に移り、鰊漁場を開いたものである。

小倉家の稲荷堂の建立年代は、利尻島移住後間もなくのことであると考えられ、戦時中に約1m四方の祠が朽ち果てた状態であった。

高橋氏が野中に移住した当時、家族に病気や負傷などの事故が相次いだことから、沓形種富町の戸部さんに伏見稲荷神、すなわち正一位稲荷大明神の分身を勧請し、譲り受け家内の安全を守る神として、あるいは、鰊豊漁の神として信仰を続けてきたものである。鰊が凶漁となる昭和30年以降は鰊釣漁業、サメ釣漁業の豊漁を願う神として、さらに現在では、間接的にではあるが親族がおこなっている大謀網漁業の神として信仰を続けている。

鰊漁時代における祭礼行事としては、戸部さんに大漁祈願をお願いし、「正一位稲荷大明神」の幟を揚げ、赤飯・油揚・魚・神酒・御鏡・昆布二枚・鯛二枚・　二本・お菓子を供え、家族総出で

参詣した。昆布は〝ヨロコブ〟として目出度いときの供物として鯣とともによく使われ、　の二本は夫婦仲良くという意味をもっていた。鰊漁期には、15人の近所の人々の参詣もあり、賑やかに酒宴などがおこなわれていた。

年に一度の北見神社の祭典には、鰊漁期におこなっていたのと同じ供物を供え、漁業豊漁の感謝の気持ちを込めて厚く信仰している。しかし、戸部さんが死んでからの祈禱はおこなっていない。

(6) 秋田谷稲荷明神

東利尻町鬼脇にある日蓮宗妙泰寺の境内に一間四方の稲荷堂がある。この稲荷堂は大正初期の建立と考えられる。それは、祭祀信仰者は鰊建網業者、秋田谷久兵衛と妻フユ、その子久吉氏が、明治32年当時、法華経信者でもあって、鰊番屋において僧侶本間春朝師を中心として法華講を盛んにおこなっていたこと、さらに、久吉氏の在住年代、現在の稲荷堂の状態から推測される。

秋田谷久兵衛氏は、明治17年に綱島貞助氏と共に鬼脇村総代人を務め、同19年旧８月６日に死亡している。同氏の墓は大正７年に建立されており、また、妙泰寺の本堂として使われている建物は秋田谷氏の鰊番屋であり、その寄進がやはり大正７年であることからも、現稲荷堂の建立年代は大正初期であると考えられる。建立当初は秋田谷稲荷大明神とよばれていた。

秋田谷氏の鰊漁場は鬼脇の沼浦にあったが、住宅は鬼脇四番地、現妙泰寺にあったことから稲荷堂も住宅の敷地内に建てたものである。

その他、由来、変遷などについては不明で今後の調査に待ちたい。しかし、秋田谷氏が利尻島を去った後、稲荷堂がそのまま残されていたことから、鬼脇が鰊漁や蟹漁で賑わっていた当時、十数軒あった遊廓の遊女が信仰していたことがあった。遊廓の商売繁昌の神として信仰されていたのであろうか。

(7) 又稲荷明神

通称「マンジョウの岬」と呼ばれている鬼脇港の南端の岬に、「稲荷神社」と刻まれている石碑が立っている。石碑の裏には「大正八年六月十日　勤続四十五年　藤田三之」と刻まれている。

明治４年にすでに漁場を経営していた、杉村幸右衛門の屋号が「又」（マタイチ）であり、同35年に利尻出張所と称して鬼脇に六ケ統の鰊漁場を持ち、そのうちの一ケ統を田中将吉氏を支配人として経営にあたらせていた。ここの漁場に稲荷堂が建てられてたというが、建物は現存していない。建立年代は明治中頃と考えられるが、詳しくは不明である。この　漁場は昭和６年まで続いていたが、稲荷信仰そのものは、それ以降も続いたのである。帳場が祝祠をあげ、いくつもの鳥居をくぐり抜け、大鏡餅を供える状景は見事であったと伝えられている。

(8) 富士岬の稲荷社

鴛泊富士岬のやや中間に位置する。木下音吉氏宅に隣接し、海に向って二間四方の稲荷堂が建っている。祭神は伏見稲荷大明神である。「サイモンサの稲荷さん」とか「木下の稲荷さん」などと

呼ばれている。

明治後期に、鳥取県気高郡の出身である小林松太郎氏が、鰊漁場の経営しそこに稲荷堂を建て信仰していたといわれている。屋号は「サンナミ」といわれていたが、どのように表示していたかは不明である。小林氏死亡後2年目の大正2年に、倉与四松氏が小林氏の土地を一部買受けたが、その買受けた畑のなかから現在祭祀している稲荷さんが発見された。これは、小林氏死亡時に東の暴風が吹き、祠を吹き飛ばされたことがあり、稲荷さんともども紛失していたものである。

発掘された稲荷さんを、倉与四松氏・石羽沢徳太郎氏・沖島久蔵氏・中野音吉氏・津崎友吉氏が主となって、現在の祠の二倍程の大きさの堂を建立した。建立時には、富士岬住民60名が寄進となっており、初午や郷土の祭典など年三回神主を招き、祭礼行事を執行し「おみくじ」をとったという。

この稲荷堂は、昭和7年12月に改築している。寄付板には倉与四松・石羽沢徳太郎・丸田名平・木下喜太郎・石羽沢安太郎・清水長五郎・沖島久造の氏名など80名以上が記されている。

三度目の改築は、昭和27年10月4日付で、寄付板には「稲荷社造営　寄付者芳名簿」と記載され、石羽沢常太郎・木下音吉・沖島勇・中座寅次の名氏等25名が、一人1,280円を均等額で寄付し、合計額30,720円になっている。また、同寄付板の後部には「棟梁　浜塚喜太郎　世話人　石羽沢常太郎・木下音吉・中座寅次・中野音次郎・津崎友吉」が記されている。

次いで4回目の修築は、昭和58年11月24日で、「棟梁　浜田政志　大工　菅原樹　世話人　江畑留治・米谷利一・清水一雄・戸山喜太郎・木下吉郎・倉豊継」とあり、総工費56万3千円で建造している。稲荷堂の大きさは二間四方もので、これが現在地にあるものである。寄付者は、「五万円也　木下吉郎・倉豊継　三万円也　中座寅一　二万円也　米谷利一・山野寺栄嗣　一万五千円也　江畠吉　一万円也　片山喜太郎・清水一雄・山野寺綾作・中野幸次郎・沖島勇・小松茂雄・上野ツル・丸田尚・須間悦雄・北出判一・綿木尚・新田喜代治・嶋田外義・坂本勇・三浦良大・五千円也　三浦光夫・津崎光宏・山口タマ・岡部忠男・上野敏弘」である。他に、小倉直三郎・岡本ヨシ・米谷みさ子の各氏等による造営木材一式（十二万円）、屋根工事一式（九万五千円）に木下吉郎・倉豊継の両氏など合計31名が記載されている。

このように、富士岬の稲荷堂は多数の人々によって支えられているが、講組織はみられない。しかし、倉佐衛門・与四松・豊富・豊継の倉家四代にわたる信仰と、倉家と親類にあたる木下家の両家がこの稲荷信仰を支えているといってよい。

勿論、富士岬では漁業全般の豊漁をもたらす神として信仰され、赤飯・御鏡・油揚・神酒等を供え、歌ったり踊ったりし、正一位伏見稲荷の幟りとともに、稲荷堂前は大変な賑やかさであった。現在は、以前ほどの祭礼行事はおこなわれていない。

富士岬地区の人々は、津軽・能登・越前・因幡など様々であるが、法華経信者が集中している地域でもある。

2. その他の稲荷信仰

鰊建網業者のみならず、鰊刺網業者・水産物仲買人もまた稲荷を信仰していた。それらは、鰊豊漁の他に商売繁昌、航海安全の願をかけ祭祀されていたものが多くあり、また、個人・集団・部落など様々な信仰形態を有し、利尻島に広く信者を有する豊川稲荷・高山稲荷・豊受稲荷などがみられるが、やはり圧倒的に多いのは伏見稲荷である。

現在までに把握したところでは、個人で祭祀信仰しているところが4、集団で信仰しているところが2、部落神社として信仰されているところが1ケ所である。

(1) 栄浜神社

当初は、鴛泊字大磯ポロフンベにあったのを、沓形の日中（ニッチュウ、現在の字名は栄浜）の人々と共同で祠を造り祭祀信仰するようになったものである。主祭神は伏見稲荷であるが、金比羅さんも合祀されている。

もとは、現在利尻町と東利尻町の境界となっているトビウシナイ沢の岩山に建立したものであるが、当時の様子については不明である。

その後、トビウシナイ沢の岩山から、明治43年に日中の藤田芳雄氏宅の近くに移設したことから、藤田家は「稲荷さんの家」と呼ばれるようになった。移設に関する年代は、明治43年12月26日と記録にある。その当時の棟札には、「奉斉　稲荷神社　社殿新築再建落成正遷宮　願主　日中　幌分辺崇敬者　祭主　常盤井武胤」とある。

さらに、昭和37年に藤田家の近くから現在地に移転した。「昭和三十七年四月　本殿遷宮」と棟札が掲げられている。これにより栄浜神社として位置づけられた。

栄浜神社は、このような変遷により現在に至っているのであるが、社殿内には「金刀羅宮　明治二十四年」の掲額があり、これがどのような意味をもつのか、現時点では解き明かすことができない。もともと金刀羅宮だったものに伏見稲荷を合祀したものか、あるいは稲荷堂に、どこか別の場所にあった金刀羅宮の建物が廃屋となったことから掲額だけが移されたものなのか、あるいは、両者も別々のところにあったものが、明治43年あるいは昭和37年などの建物の造営の祭に同時に合祀されたものなのか、いずれとも決しがたい。しかし、現時点での主祭神は伏見稲荷であることはいうまでもない。

また、古くから鳥居が寄進されている。最も古いもので明治42年6月18日に大窪石松外12名、次いで、大正4年9月18日の寺山卯吉、最後は昭和56年6月12日で、これは地域の信者全員による寄進である。かつての祭札行事などは不明であるが、稲荷信仰に共通の供物・祈禱は北見富士神社の神主が務めているという。

(2) 柿元の稲荷さん

北見富士神社境内に約一間四方の稲荷堂がある。祭神は、正一位稲荷大明神である。なかに小さな紺色の幕があって、柿元恒吉氏の名が記されている。堂の建立年代は昭和40年頃のことである。

同氏は柿元漁業部を設け、漁業神として稲荷を信仰し、岩山の「キツネ森」に祠を建て祭祀していたが、その祠堂は昭和39年5月15日の大火により焼失してしまった。その後、再建したのが、北見富士神社の境内にあるものであり、現在は祭礼行事等は全くおこなわれていない。

(3) 鳴海の稲荷さん

鳴海万次郎氏は、昭和10年頃に近くの小山に一間四方の祠を造り高山稲荷をまつった。それは、青森県西津軽郡車力村より布教者が布教に訪れた際、鳴海氏の妻がちょうど病気中であり、布教者のすすめもあって、病気平癒にも利益があると信じて信仰するようになった。現在では、もちろん漁業神としても位置づけられている。

かつては、年2回青森県の高山神社に参詣していたが、現在では寄付金を送り、「札・護符」を受けているだけである。高山稲荷をご神体としている利尻島内唯一の例である。

毎月10日が例祭日で、赤飯・神酒・油揚・果物を供え、家族で参拝するなど、個人信仰で守り続けている。

なお、鳴海氏の出身地は布教者と同じ西津軽郡車力村である。祠はあるが、ご神体は約30cm程のもので、風雨吹雪から守るために家屋内に安置している。「お助け稲荷」と呼ばれ、漁業者の信仰を集めているという。

(4) 吉田の稲荷さん

東利尻町鬼脇字野中の吉田吉太郎氏宅に、普通とは異なる稲荷さんが祭祀されている。吉太郎氏の曾祖父千代吉氏が、明治20年代の初め頃に利尻に移住したのに伴ない、家屋の近くに祠をつくり稲荷さんをまつったが、その子、金六郎の代になって祠堂が荒廃したのを契機に家屋内にまつるようになった。幅一間に奥行三尺程の堂々たる祭壇に、神鏡・御幣・神燈・振鈴房の神具がみられる。

毎月10日が例祭日で、その日には一般的な供物のほかに大根・人参をも供えているという。これは、漁業神の信仰とともに豊業神としての信仰によるものである。

祭神は正一位稲荷大明神で、千代吉氏から吉太郎氏までの四代にわたって信仰祭祀されている。

吉田家は青森県東津軽郡一本木村の出身であり、前述の小倉家とは親類関係にあたる。

(5) 金の稲荷さん

東利尻町鴛泊の利尻山神社の境内に、幅3m・奥行2m程の祠があり、「正一位稲荷大明神」の白染抜き文字の幟りが揚げられている。祠のなかには、神燈があり、祭壇には狐（陶器）八体が祀られている。神燈（一対の提灯）には、「昭和二十九年六月吉日　金隆秀」と記されている。また、幟りには「昭和五十六年六月　田中豊蔵　ツヤ」と、「昭和五十七年一月　京谷正秋　三枝子　恭子」とがある。幟りは常時揚げられている。

金隆秀氏は、昭和27年頃に水産物仲買商を開業し、玉福丸という船を所有し、新潟県～利尻間を航海していたが、昭和40年頃に時化により遭難沈没し、溺死している。

この利尻山神社境内の稲荷堂の建立年代については、それを探る資料に乏しく、僅かに神燈に記されている昭和29年ぐらいのものである。金氏が水産物仲買商を開業したのが昭和27年であることから、いずれにしても同27～29年に建立されたと考えて良いだろう。

現在は、稲荷堂にかかる祭礼行事はなく、時折、不特定の信者が参詣するぐらいである。

(6) 前川稲荷

沓形字神居に、前川モヨ氏の司祭する神社がある。一般的には「前川稲荷」と呼ばれているが、主祭神は伏見稲荷である。前川稲荷のはじまりは、明治33年頃、厚田村から鰊漁場の漁夫として出稼ぎにきていた前川熊吉氏が、番屋で風呂に入っているときに正一位稲荷大明神の姿を見たことに始まる。

祠堂内には、「明治三十四年八月　利尻郡沓形村カモイヌカ　牧田ミサヲ」寄進の絵馬と、「大正元年八月二十四日　沓形村カモイヌカ　中村勝義」奉納の綿絵もみられる。

大正７年に、現在の社殿に改築したが、その資金造成のため前川モヨ氏は利尻島内をまわり調達したという。広さは12㎡程の社殿であり、大工は嵯峨氏であった。

前川熊吉氏は大正４年に没したが、大正２年にはモヨ氏が信仰を継承し現在にいたっている。

鰊漁の盛んな頃は、島内全域から50～ 100 人程の参詣者があり、酒一斗を用意したことなどもあったというが、鰊が幻の魚となった現在では５～10人位の参詣者がみられるだけである。祭礼日は毎月10日とし、９月28日には大祭を執行し賑やかにおこなわれ、また、春の例祭日には「おみくじ」もあったという。

前川稲荷の主祭神は伏見稲荷であるが、一部信仰者には「豊川稲荷」であると伝えられている。豊川稲荷は仏教系で、愛知県豊川市、妙厳寺にある稲荷堂で、仏教護法神、ダキニシン天を祭神とし福徳開運の利益があると信じられている。

また、昭和19年に北見富士神社常盤井宮司に依って、神習教大教庁に司祭者としての許可を得るために上京している。神習教は、イザナミノ命を祭神とする潔教で、心身を木浴潔斉する教えであって、伏見稲荷ではない。しかし、司祭者としての資格を得、おもに病気平癒の神として信仰している。

このように、前川稲荷は漁業神として伏見稲荷、病気治癒の神として神習教、家業開運は豊川稲荷と三つの性格があるが、それぞれに役割をもって機能している。

3. 鰊漁皆無になってからの稲荷信仰

漁業神としての民間信仰は、絶えずその内容をかえていく。鰊漁への期待が大きい程、信仰もまた深く、祭礼行事も盛大に賑やかに執行されてきた。

しかし、鰊漁に望みのなくなった今日、信仰も希薄になり徐々に衰退している。一部は消滅しているところもある。現在もかわることなく祭礼行事が続けられているところは、東利尻町鬼脇字野中の高橋留次郎氏、吉田吉太郎氏、同鴛泊字富士岬の木下氏、利尻町仙法志字政泊の宮下キミ氏、

同仙法志字御崎の鳴海正吉氏等である。他の多くは、年一度の郷土の祭典時のみだけ祭祀される場合が多い。

坪田の稲荷さんは、政泊港神社と改称されてからは「正一位稲荷大明神」の幟りが郷土祭典の際にもみられなくなり、沓形北見富士神社の柿元氏の稲荷も祭る者もなく、また、鴛泊利尻山神社の稲荷も少数の信者が年一・二度供物を供える位である。

鰊建網・同刺網、水産物仲買人を問わず、鰊漁がなくなった現在、祠堂はほとんど放置、または、形のみとなり、世代がかわっていくなかで、まったく祭礼信仰がされていない実態から考えると、今後はさらに希薄化し、やがて消滅していく状況にある。

このような現象は、一般個人に見られる稲荷信仰も同様で、放置されたり、狐の模型などが、それぞれの地域神社の神棚の片隅に置かれているという状態である。

4. まとめ

鰊漁業を中心としてきた利尻島の漁民は、精神的に大漁を神に託した。この神のなかには、特に、稲荷信仰が大きな比重を占めていたのである。しかし、鰊漁の途絶えた今日では、漁業神への信仰は遠く離れた存在になりつつある。

豊漁を神に祈る心情の一つには、鰊は群来するもの、すなわち待っている漁法である。ぜひ来て欲しいという願望が、全国的に普遍的に存在した稲荷信仰を、五穀豊穣・商売繁昌の信仰から、大漁満足へと信仰内容を変貌させている。

祭礼日について考察すると、豊川・豊受・伏見・高山の何れもが、本来祭礼日が異なるのに対して、利尻島においては、すべてが一定しているのも信仰の混同であるが、供物においては油揚・鏡餅・魚と共通するもの以外は、各々若干の違いがみられるが、それはそれぞれがどのような利益をもたらすかということの違いによるものである。

また、稲荷信仰は出身地域や職業の区別なく、利尻島内に普遍的な広がりをもって、本来の稲荷信仰から、自分達の都合がよく、利益をもたらす神につくりあげられてきた。したがって、本来の屋敷の神あるいは鎮守の神としての信仰はまったくみられない。

さらに、鰊漁とともに利尻の漁業発展の礎となった鱈釣漁業において、稲荷信仰はほとんどみられない。このことは、建網・刺網を問わず鰊漁に広くみられたのと対照的である。この理由については、鱈釣漁がおもに北陸地域の人々を中心におこなわれ、鰊漁が東北地域の人々によっておこなわれていたことや、鰊漁の建網業者は経済的に鱈釣漁業者よりも豊かであったことなどが考えられるが、決め手はない。

鱈釣漁業者には龍神や金比羅などの信仰がみられるが、しかし、稲荷を信仰する鰊漁業者のなかには、龍神や金比羅を信仰する人々も多くある。このようなことは、離島の漁民信仰を考える上で興味深い事実である。

祈禱者も一定せずに、信者であったり、宮司であったりして一定したものがない。また、供物も供えお参りするだけという場合が多く、信者の数も一定せず、たえず増減が繰り返えされている。

合祀することも、されることも比較的容易であり、信者がかたくなに拒むこともない。むしろ、豊漁の神であれば同一視する例も少なくない。

いずれにしても、鰊漁と深くかかわりあっていた稲荷信仰は、鰊漁がまったくおこなわれなくなった現在、徐々に衰退し、また形をかえて現在に定着しているのである。

参考文献

利尻町立博物館年報第１～４集　　利尻町立博物館
北海道開拓記念館調査報告第23・24号　　北海道開拓記念館

本調査をまとめるにあたり次の方々のご協力があった。
仙法志地区　宮下　昭一・加茂秀太郎・鳴海　正吉・伊佐田省三
沓形地区　金田　幹男・田原　滝雄・小坂　市蔵・前川　モヨ・西谷栄治
鴛泊地区　倉　　豊富・京谷丈雄・鈴木良助
鬼脇地区　鎌田幸二郎・高橋留次郎・吉田吉太郎・寺島まき

・島内稲荷神社一覧表（一）

名称	所在地	創始者	出身地	創立年代
政泊港神社	利尻町仙法志字政泊	坪田伊三郎	福井県	明治32
長浜神社	利尻町仙法志字長浜	佐々木民蔵	鳥取県	明治30
宮下の稲荷	利尻町仙法志字政泊	田中多吉	新潟県	昭和10
鳴海の稲荷	利尻町仙法志字御崎	鳴海万次郎	青森県	昭和10
戸部の稲荷	利尻町沓形字種富町	柳谷福太郎	青森県	昭和7
栄浜神社	利尻町沓形字栄浜	ポロフンベ〔栄浜〕の人々	青森県他	明治34
柿元の稲荷	利尻町沓形字緑町	柿元恒吉	北海道厚田村	昭和15
前川稲荷	利尻町沓形字神居	前川熊吉	岩手県	明治34
高橋の稲荷	東利尻町鬼脇字野中	高橋留次郎	青森県	昭和20
又稲荷明神	東利尻町鬼脇	田中将吉	北海道松前町	明治30
秋田谷稲荷	東利尻町鬼脇	秋田谷久吉	新潟県	大正初期
吉田の稲荷	東利尻町鬼脇字野中	吉田千代吉	青森県	明治30
倉の稲荷	東利尻町鴛泊字富士岬	倉与四松	石川県	大正2
金の稲荷	東利尻町鴛泊字栄町	金隆秀	新潟県	昭和29

・部落神社に合祀されている稲荷

名称	所在	主祭神	部落の主な出身地
二ッ石神社	東利尻町鬼脇字二ッ石	龍神	青森県
旭浜神社	東利尻町鬼脇字旭浜	龍神	青森県
鰊泊神社	東利尻町鬼脇字鰊泊	龍神	青森県

・島内稲荷神社一覧表(二)

地域	所在	祭神	信仰内容
利尻町沓形字種富町	戸部の稲荷	伏見稲荷	大漁
利尻町仙法志字政泊	政泊港神社	伏見稲荷	大漁（金比羅を合祀）
利尻町仙法志字政泊	宮下昭一氏宅	伏見稲荷	大漁
利尻町仙法志字長浜	長浜神社 長浜自治会館内	豊受稲荷	大漁（八幡神を合祀）
東利尻町鬼脇字野中	高橋の稲荷	伏見稲荷	大漁・病気治癒
東利尻町鬼脇	鬼脇港南端 マンジョの岬	伏見稲荷	大漁
東利尻町鬼脇	日蓮宗妙泰寺境内 秋田谷稲荷	伏見稲荷	大漁・商売繁昌
東利尻町鴛泊字富士岬	倉の稲荷	伏見稲荷	大漁
利尻町沓形字栄浜	栄浜神社	伏見稲荷	大漁・金比羅を合祀
利尻町沓形字緑町	北見富士神社境内 柿元の稲荷	伏見稲荷	大漁
利尻町沓形字神居	前川稲荷	伏見稲荷	大漁・病気治癒・家業開運
東利尻町鬼脇字野中	吉田吉太郎氏宅	伏見稲荷	大漁・農業
東利尻町鴛泊字栄町	利尻山神社境内 金の稲荷	伏見稲荷	商売・航海安全
利尻町仙法志字御崎	鳴海の稲荷さん	高山稲荷	大漁・病気治癒

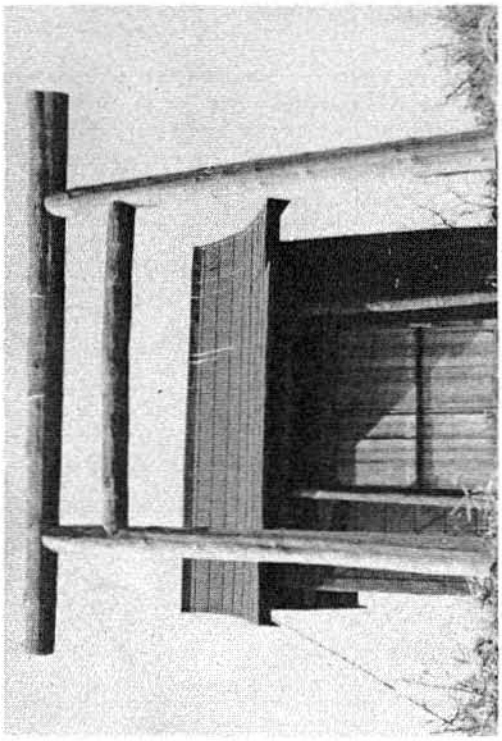


写真1　政泊神社

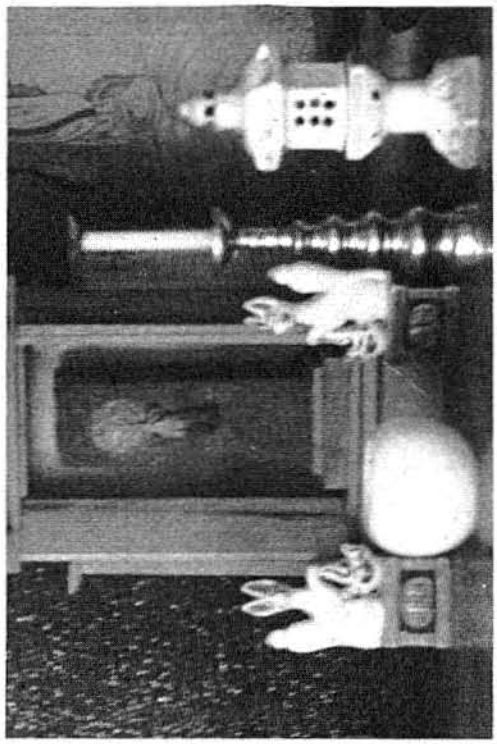


写真3　宮下の稲荷さん

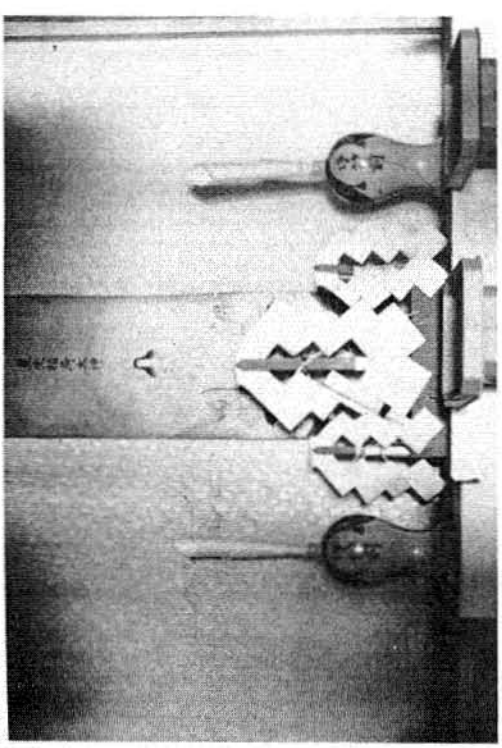


写真2　長浜神社

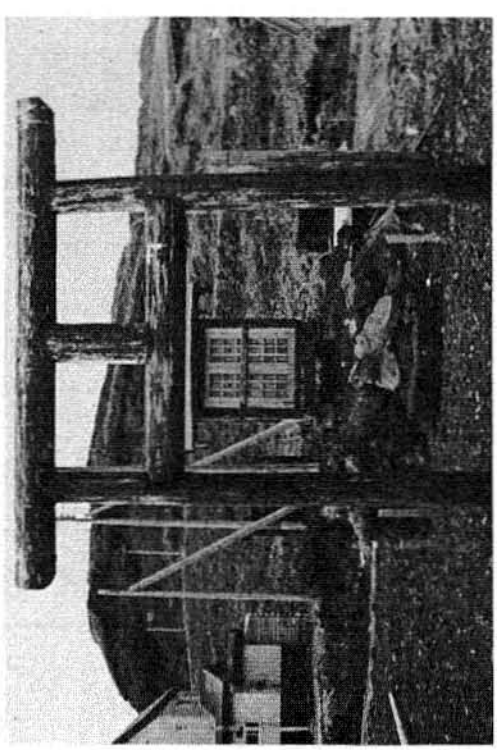


写真4　高橋の稲荷さん

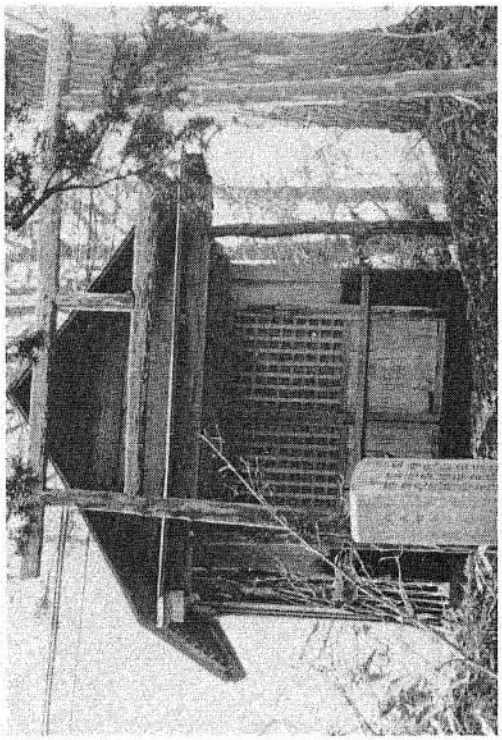


写真 5　秋田谷稲荷明神（妙泰寺境内）

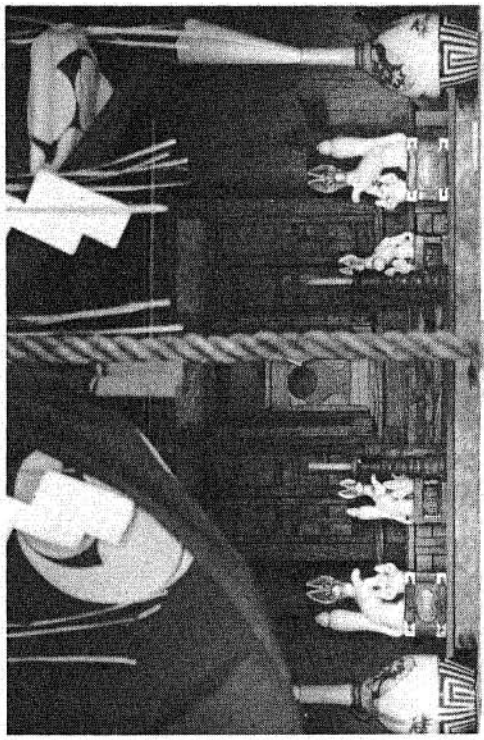


写真 7　富士岬　稲荷社内部

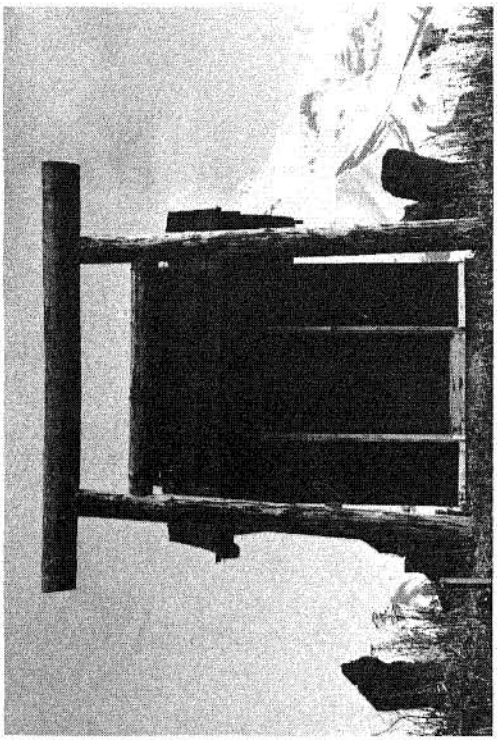


写真 6　富士岬　稲荷社

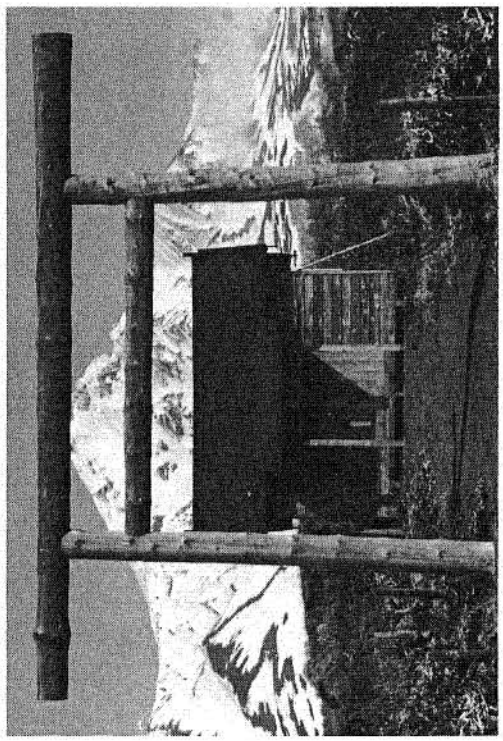


写真 8　栄　浜　神　社

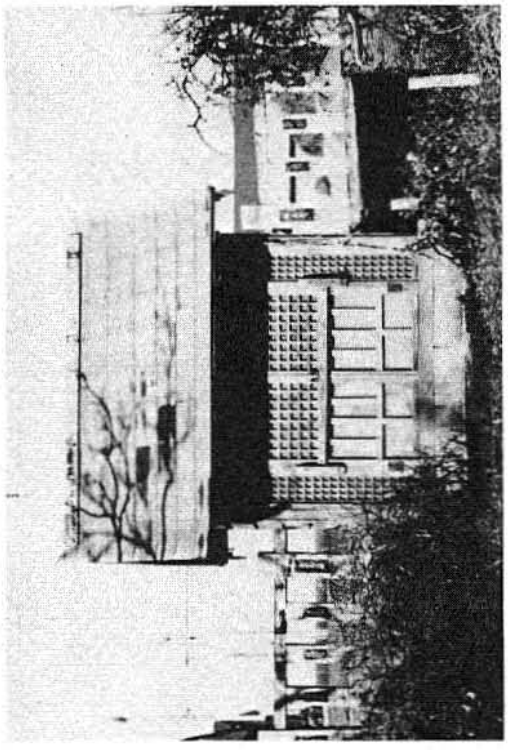


写真9　柿元の稲荷さん

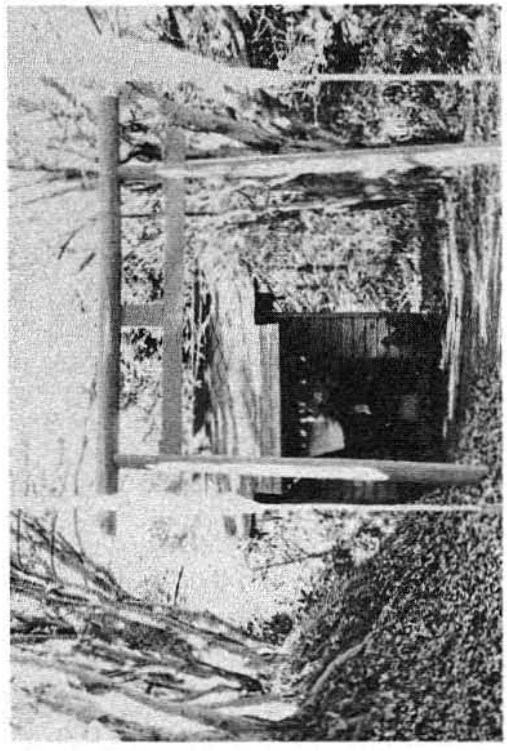


写真11　金の稲荷さん

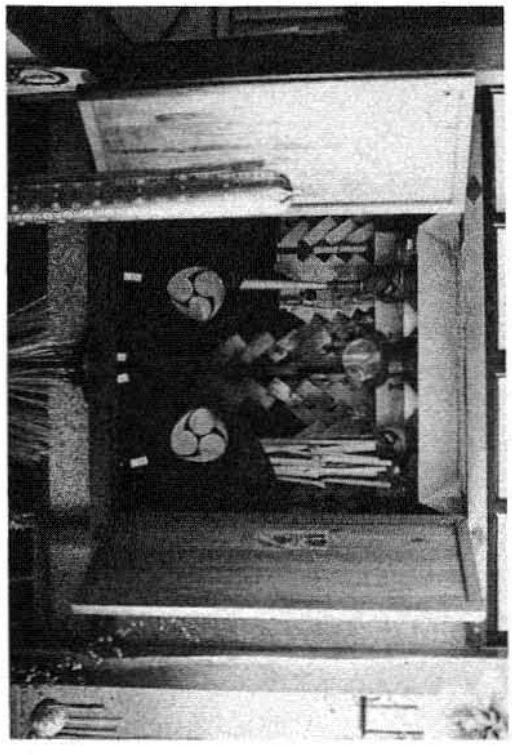


写真10　吉田の稲荷さん

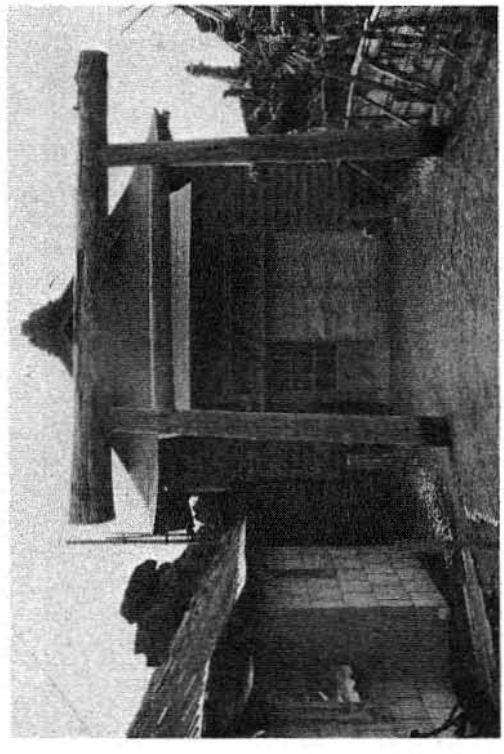


写真12　前川稲荷